



CHAPTER 2

インターフェイス パラメータの設定

この章では、基本的なインターフェイス パラメータや複数のインターフェイスにより共有されるパラメータを設定する手順について説明します。

この章は、次の内容で構成されています。

- 「基本インターフェイス パラメータについて」 (P.2-1)
- 「注意事項および制約事項」 (P.2-3)
- 「基本インターフェイス パラメータの設定」 (P.2-4)
- 「基本インターフェイス パラメータの確認」 (P.2-14)
- 「基本インターフェイス パラメータの機能履歴」 (P.2-14)



(注) レイヤ 2 アクセスまたはトランキング インターフェイスを設定する場合は、第 2 章「インターフェイス パラメータの設定」を参照してください。

基本インターフェイス パラメータについて

ここでは、次の内容について説明します。

- 「説明パラメータ」 (P.2-2)
- 「速度モードとデュプレックス モード」 (P.2-2)
- 「ポート MTU サイズ」 (P.2-2)
- 「管理ステータス」 (P.2-3)
- 「Cisco Discovery Protocol」 (P.2-3)
- 「ポート チャネル パラメータ」 (P.2-3)

説明パラメータ

Virtual Ethernet (vEthernet; 仮想イーサネット) インターフェイス、イーサネット インターフェイス、および管理インターフェイスに説明パラメータを設定して、インターフェイスにわかりやすい名前を付けることができます。それぞれのインターフェイスに独自の名前を使用すれば、複数のインターフェイスから探す場合でも必要なインターフェイスをすぐに見つけることができます。

デフォルトでは、vEthernet インターフェイスの説明は、接続されているデバイスに関する情報を含めるために自動フォーマットされます。たとえば、VNIC の説明には、VM 名とネットワーク アダプタ番号が含まれます。このデフォルトの説明を保持することも、選択した説明で上書きすることもどちらも可能です。

ポート チャネル インターフェイスに説明パラメータを設定する方法については、「[ポート チャネル インターフェイスへの説明の追加](#)」(P.5-37) を参照してください。

別のインターフェイスにこのパラメータを設定する方法については、「[説明の設定](#)」(P.2-5) を参照してください。

速度モードとデュプレックス モード

速度モードとデュプレックス モードは、それぞれのイーサネット インターフェイスおよび管理インターフェイスと相関関係にあります。デフォルトでは、これらのインターフェイスの速度およびデュプレックス モードは他のインターフェイスとそれぞれ自動ネゴシエートしますが、設定を変更することもできます。設定を変更する場合は、両方のインターフェイスで同じ速度とデュプレックス モード設定を使用するか、または少なくとも 1 つのインターフェイスに自動ネゴシエーションを使用します。

ポート チャネル インターフェイスに速度モードおよびデュプレックス モードを設定する方法については、「[ポート チャネル インターフェイスへの速度とデュプレックスの設定](#)」(P.5-38) を参照してください。

他のインターフェイスに速度モードおよびデュプレックス モードを設定する方法については、「[インターフェイス速度およびデュプレックス モードの設定](#)」(P.2-7) を参照してください。

ポート MTU サイズ

Maximum Transmission Unit (MTU; 最大伝送ユニット) サイズは、イーサネット ポートで処理できる最大フレーム サイズを指定します。2 つのポート間で転送するには、どちらのポートにも同じ MTU サイズを設定する必要があります。ポートの MTU サイズを超えたフレームはドロップされます。

デフォルトでは、各ポートの MTU サイズは 1500 バイトであり、イーサネット フレームの IEEE 802.3 標準です。これよりも大きい MTU サイズでは、より少ないオーバーヘッドでデータをより効率的に処理できます。このようなフレームはジャンボ フレームと呼ばれ、最大 9000 バイトまでのサイズを指定できます。これも、Cisco Nexus 1000V での固定されたシステム ジャンボ MTU サイズです。

レイヤ 2 ポートには、MTU サイズとして、システム デフォルトの 1500 バイトまたはシステム デフォルトのジャンボ MTU サイズ 9000 バイトのいずれかを設定できます。

MTU サイズの設定手順については、「[イーサネット インターフェイスの MTU サイズの設定](#)」(P.2-8) を参照してください。

管理ステータス

管理ステータス パラメータはインターフェイスのアップまたはダウンを指定します。管理的にダウンしたインターフェイスはディセーブルであり、データを転送できません。管理的にアップしたインターフェイスはイネーブルであり、データを転送できます。

詳細については、次の項を参照してください。

- 「ポート チャネルインターフェイスのシャットダウンと再起動」(P.5-36)。
- 「インターフェイスのシャットダウンおよび再開」(P.2-10)。

Cisco Discovery Protocol

Cisco Discovery Protocol (CDP) は、2 台のデバイスで CDP を実行して相互に学習しあうことができるレイヤ 2 プロトコルです。CDP を使用すれば、お互いのインターフェイスを通じてリンクされているネイバー デバイスの情報を表示してネットワークをトラブルシューティングできます。デフォルトでは、CDP がイネーブルに設定されています。

CDP を設定するには、「CDP のイネーブル化/ディセーブル化」(P.2-11) を参照してください。

ポート チャネル パラメータ

ポート チャネルは物理インターフェイスの集合体で、論理インターフェイスを構成します。1 つのポート チャネルに最大 8 つの個別インターフェイスをバンドルして、帯域幅と冗長性を向上させることができます。これらの集約された各物理インターフェイス間でトラフィックのロード バランシングも行います。ポート チャネルの物理インターフェイスが少なくとも 1 つ動作していれば、そのポート チャネルは動作しています。

変更した設定をポート チャネルに適用すると、そのポート チャネルのインターフェイス メンバにもそれぞれ変更が適用されます。

ポート チャネルを設定する場合は、「ポート チャネルの設定」(P.5-1) を参照してください。

注意事項および制約事項

インターフェイス パラメータには、次の注意事項と制限があります。

- 通常、イーサネット ポートの速度およびデュプレックス モード パラメータを自動的に設定し、ポート間で速度およびデュプレックス モードをネゴシエートできるようにします。これらのポートのポート速度およびデュプレックス モードを手動で設定する場合は、次の点について考慮してください。
 - イーサネット ポート速度を自動的に設定すると、デバイスは自動的にデュプレックス モードを自動的に設定します。
 - **no speed** コマンドを開始すると、デバイスは速度およびデュプレックス パラメータの両方を自動的に自動的に設定します (**no speed** コマンドを入力すると、**speed auto** コマンドを入力した場合と同じ結果になります)。
 - イーサネット ポート速度を自動以外の値 (10 Mbps、100 Mbps、1000Mbps など) に設定する場合は、それに合わせて接続先ポートを設定してください。接続先ポートが速度をネゴシエーションするように設定しないでください。



(注) 接続先ポートが自動以外の値に設定されている場合、デバイスはイーサネット ポート速度およびデュプレックス モードを自動的にネゴシエートできません。



(注) イーサネット ポート速度およびデュプレックス モードの設定を変更すると、インターフェイスがシャットダウンされてから再びイネーブルになる場合があります。

- インターフェイスを CLI で指定するには、次の注意事項に従ってください。
 - イーサネット ポートの場合：**ethernet slot/port** を使用します。*slot* はモジュールのスロット番号、*port* はポート番号です。
 - 管理インターフェイスの場合：**mgmt 0** または **mgmt0** を使用します。
 - vEthernet ポートの場合：**vethernet number** を使用します。*number* は 1 ~ 1048575 の番号です。
 - インターフェイス タイプと、スロット/ポートまたはインターフェイス番号の間に空白は必要ありません。たとえば、イーサネット スロット 4、ポート 5 インターフェイスの場合、次のいずれかを指定できます。
 - ethernet 4/5**
 - ethernet4/5**
- ジャンボ フレームは、**vmxnet3** ドライバでのみサポートされます。MTU を変更しようとするとうまく見えますが、アダプタは常に、1500 バイトより大きいフレームをドロップします。詳細については、VMware KB の記事 [1015556](#) を参照してください。

基本インターフェイス パラメータの設定

ここでは、次の内容について説明します。

- 「設定するインターフェイスの指定」(P.2-4)
- 「説明の設定」(P.2-5)
- 「インターフェイス速度およびデュプレックス モードの設定」(P.2-7)
- 「イーサネット インターフェイスの MTU サイズの設定」(P.2-8)
- 「インターフェイスのシャットダウンおよび再開」(P.2-10)
- 「CDP のイネーブル化/ディセーブル化」(P.2-11)

設定するインターフェイスの指定

この手順を使用すると、設定するインターフェイスを指定できます。

はじめる前に

この手順を開始する前に、次のことを確認または実行する必要があります。

- EXEC モードで CLI にログインしていること。

手順の概要

1. `config t`
2. `interface interface`
3. `show interface interface`

手順の詳細

	コマンド	目的
ステップ 1	config t Example: n1000v# config t n1000v(config)#	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	interface interface Example: n1000v(config)# interface ethernet 2/1 n1000v(config-if)#	特定のインターフェイスのインターフェイス コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 3	show interface interface Example: n1000v(config-if)# show interface ethernet 2/1	現在のインターフェイス設定を表示します。 interface 引数を次のように定義します。 <ul style="list-style-type: none"> • イーサネット ポートの場合、ethernet slot/port を使用します。<i>slot</i> はモジュールのスロット番号、<i>port</i> はポート番号です。 • 管理インターフェイスの場合、mgmt 0 または mgmt0 を使用します。 • vEthernet ポートの場合、vethernet number を使用します。<i>number</i> は 1 ~ 1048575 の番号です。

説明の設定

この手順を使用すると、イーサネット インターフェイス、vEthernet インターフェイス、または管理インターフェイスに説明を追加できます。

はじめる前に

この手順を開始する前に、次のことを確認または実行する必要があります。

- EXEC モードで CLI にログインしていること。
- 説明は、大文字と小文字を区別する英数字で、最大 80 文字の長さになります。

手順の概要

1. `config t`
2. `interface interface`
3. `description string`

4. `show interface interface`

5. `copy running-config startup-config`

手順の詳細

	コマンド	目的
ステップ 1	<code>config t</code> Example: n1000v# <code>config t</code> n1000v(config)#	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	<code>interface interface</code> Example: n1000v(config)# <code>interface ethernet 2/1</code> n1000v(config-if)#	特定のインターフェイスのインターフェイス コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 3	<code>description string</code> Example: n1000v(config-if)# <code>description Ethernet port 3 on module 1.</code> n1000v(config-if)#	英数字で 80 文字までの説明をこのインターフェイスに追加し、実行コンフィギュレーション内に保存します。
ステップ 4	<code>show interface interface</code> Example: n1000v(config)# <code>show interface ethernet 2/1</code>	インターフェイス ステータスを表示します。説明もあわせて表示します。
ステップ 5	<code>copy running-config startup-config</code> Example: n1000v(config)# <code>copy running-config startup-config</code>	(任意) リブート後に永続的な実行コンフィギュレーションを保存し、スタートアップ コンフィギュレーションにコピーして再起動します。

例

次に、モジュール 3 のイーサネット ポート 24 にインターフェイスの説明を設定する例を示します。

```
n1000v# config t
n1000v(config)# interface ethernet 3/24
n1000v(config-if)# description server1
n1000v(config-if)#
```

インターフェイス速度およびデュプレックス モードの設定

この手順を使用すると、インターフェイス速度およびデュプレックス モードを設定できます。

はじめる前に

この手順を開始する前に、次のことを確認または実行する必要があります。

- インターフェイス速度とデュプレックス モードは相関関係にあります。このため、両方を同時に設定する必要があります。イーサネット インターフェイスおよび管理インターフェイスに同時に設定できる速度およびデュプレックス モードについては、「[速度モードとデュプレックス モード](#)」(P.2-2) を参照してください。



(注)

指定するインターフェイス速度はインターフェイスで使用するデュプレックス モードに影響を与えません。このため、デュプレックス モードを設定する前に速度を設定する必要があります。自動ネゴシエーションの速度を設定する場合、デュプレックス モードは自動的に自動ネゴシエーションに設定されます。速度を 10 Mbps または 100 Mbps に指定すると、ポートは半二重モードを使用するように自動的に設定されますが、全二重モードを指定することもできます。1000 Mbps (1 Gbps) 以上の速度に設定すると、自動的に全二重モードが使用されます。

- リモート ポートの速度設定はローカル ポートへの変更をサポートします。ローカル ポートを固有の速度で使用するには、リモート ポートにも同じ速度を設定するか、ローカル ポートがその速度を自動ネゴシエートするように設定する必要があります。

手順の概要

1. `config t`
2. `interface interface`
3. `speed {{10 | 100 | 1000 | {auto [10 100 [1000]]}} | {10000 | auto}}`
4. `duplex {full | half | auto}`
5. `show interface interface`
6. `copy running-config startup-config`

手順の詳細

	コマンド	目的
ステップ 1	<code>config t</code> Example: <code>n1000v# config t</code> <code>n1000v(config)#</code>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	<code>interface interface</code> Example: <code>n1000v(config)# interface ethernet 2/1</code> <code>n1000v(config-if)#</code>	特定のインターフェイスのインターフェイス コンフィギュレーション モードを開始します。

	コマンド	目的
ステップ 3	<pre>speed {{10 100 1000 {auto [10 100 [1000]]}} {10000 auto}}</pre> <p>Example: n1000v(config-if)# speed 1000 n1000v(config-if)#</p>	<p>ポート速度を指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> 48 ポート 10/100/1000 モジュールのイーサネット ポートでは 10 Mbps、100 Mbps、1000 Mbps の速度を設定します。またはポートの速度を同じリンクの他の 10/100/1000 ポートと自動ネゴシエートするように設定します。 32 ポート 10 ギガビットイーサネット モジュールのイーサネット ポートでは、速度を 10,000 Mbps (10 Gbps) に設定します。または、ポートがリンクの他の 10 ギガビットイーサネット ポートの速度と自動ネゴシエートするように設定します。 管理インターフェイスでは、速度を 1000 Mbps に設定します。あるいはポートがその速度と自動ネゴシエートするように設定します。
ステップ 4	<pre>duplex {full half auto}</pre> <p>Example: n1000v(config-if)# duplex full</p>	<p>全二重モード、半二重モード、自動ネゴシエート モードを指定します。</p>
ステップ 5	<pre>show interface interface</pre> <p>Example: n1000v(config)# show interface mgmt0</p>	<p>コンフィギュレーションを表示します。</p>
ステップ 6	<pre>copy running-config startup-config</pre> <p>Example: n1000v(config)# copy running-config startup-config</p>	<p>(任意) リブート後に永続的な実行コンフィギュレーションを保存し、スタートアップ コンフィギュレーションにコピーして再起動します。</p>

例

次に、スロット 3 の 48 ポート 10/100/1000 モジュールのイーサネット ポート 1 の速度を 1000 Mbps に設定し、全二重モードに設定する例を示します。

```
n1000v# config t
n1000v(config)# interface ethernet 3/1
n1000v(config-if)# speed 1000
n1000v(config-if)# duplex full
n1000v(config-if)#
```

イーサネット インターフェイスの MTU サイズの設定

この手順を使用すると、レイヤ 2 イーサネット インターフェイスの最大伝送ユニット (MTU) のサイズを設定できます。

はじめる前に

この手順を開始する前に、次のことを確認または実行する必要があります。

- EXEC モードで CLI にログインしていること。

- イーサネット インターフェイスでは 1500 ~ 9000 バイトの MTU サイズを指定できます。
- 設定する MTU 値が VEM 物理 NIC でサポートされていることを確認してください。物理 NIC でサポートされる MTU の詳細については、VMware のマニュアルを参照してください。
- ジャンボ フレームは、vmxnet3 ドライバでのみサポートされます。MTU を変更しようとするとう成功したように見えますが、アダプタは常に、1500 バイトより大きいフレームをドロップします。詳細については、VMware KB の記事 [1015556](#) を参照してください。

手順の概要

1. `config t`
2. `interface ethernet slot/port`
3. `mtu size`
4. `show interface ethernet slot/port`
5. `copy running-config startup-config`

手順の詳細

	コマンド	目的
ステップ 1	<code>config t</code> Example: n1000v# <code>config t</code> n1000v(config)#	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	<code>interface ethernet slot/port</code> Example: n1000v(config)# <code>interface ethernet 3/1</code> n1000v(config-if)#	設定するイーサネット インターフェイスを指定します。インターフェイス コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 3	<code>mtu size</code> Example: n1000v(config-if)# <code>mtu 9000</code>	1500 (デフォルト) ~ 9000 バイトの MTU サイズを指定します。
ステップ 4	<code>show interface ethernet slot/port</code> Example: n1000v(config-if)# <code>show interface type slot/port</code>	インターフェイス ステータスを表示します。MTU サイズもあわせて表示します。
ステップ 5	<code>copy running-config startup-config</code> Example: n1000v(config)# <code>copy running-config startup-config</code>	(任意) リブート後に永続的な実行コンフィギュレーションを保存し、スタートアップ コンフィギュレーションにコピーして再起動します。

例

次に、イーサネット インターフェイス 3/1 にデフォルト MTU サイズ (1500 バイト) を設定する例を示します。

```
n1000v# config t
n1000v(config)# interface ethernet 3/1
n1000v(config-if)# mtu 1500
n1000v(config-if)#
```

インターフェイスのシャットダウンおよび再開

この手順を使用すると、イーサネット インターフェイスまたは管理インターフェイスをシャットダウンして再起動できます。

はじめる前に

この手順を開始する前に、次のことを確認または実行する必要があります。

- EXEC モードで CLI にログインしていること。
- インターフェイスをシャットダウンすると、そのインターフェイスはディセーブルになり、モニタリング コマンドの出力ではダウンしているとして示されます。
- シャットダウンしたインターフェイスを再開するには、デバイスを再起動する必要があります。

手順の概要

1. `config t`
2. `interface interface`
3. `shutdown`
4. `show interface interface`
5. `no shutdown`
6. `show interface interface`
7. `copy running-config startup-config`

手順の詳細

	コマンド	目的
ステップ1	<pre>config t</pre> <p>Example: n1000v# config t n1000v(config)#</p>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ2	<pre>interface interface</pre> <p>Example 1: n1000v(config)# interface ethernet 2/1 n1000v(config-if)#</p>	設定するインターフェイスを指定します。 <i>interface</i> 引数を次のように定義します。 <ul style="list-style-type: none"> • イーサネット ポートの場合、ethernet slot/port を使用します。<i>slot</i> はモジュールのスロット番号、<i>port</i> はポート番号です。 • 管理インターフェイスの場合、mgmt 0 または mgmt0 を使用します。
ステップ3	<pre>shutdown</pre> <p>Example: n1000v(config-if)# shutdown</p>	実行コンフィギュレーション内のインターフェイスをディセーブルにします。
ステップ4	<pre>show interface interface</pre> <p>Example: n1000v(config-if)# show interface ethernet 2/1</p>	インターフェイス ステータスを表示します。管理ステータスもあわせて表示します。

	コマンド	目的
ステップ5	<code>no shutdown</code> Example: n1000v(config-if)# no shutdown	実行コンフィギュレーション内のインターフェイスを再びイネーブルにします。
ステップ6	<code>show interface interface</code> Example: n1000v(config-if)# show interface ethernet 2/1	インターフェイスステータスを表示します。管理ステータスもあわせて表示します。 <i>interface</i> 引数を次のように定義します。 <ul style="list-style-type: none"> イーサネットポートの場合、ethernet slot/port を使用します。<i>slot</i> はモジュールのスロット番号、<i>port</i> はポート番号です。 管理インターフェイスの場合、mgmt 0 または mgmt0 を使用します。
ステップ7	<code>copy running-config startup-config</code> Example: n1000v(config)# copy running-config startup-config	(任意) リブート後に永続的な実行コンフィギュレーションを保存し、スタートアップコンフィギュレーションにコピーして再起動します。

例

次に、イーサネットポート 3/1 の管理ステータスをディセーブルからイネーブルに変更する例を示します。

```
n1000v# config t
n1000v(config)# interface ethernet 3/1
n1000v(config-if)# shutdown
n1000v(config-if)# no shutdown
n1000v(config-if)#
```

CDP のイネーブル化/ディセーブル化

この手順を使用すると、イーサネットおよび管理インターフェイスの Cisco Discovery Protocol (CDP) をイネーブルまたはディセーブルにできます。

はじめる前に

この手順を開始する前に、次のことを確認または実行する必要があります。

- EXEC モードで CLI にログインしていること。
- CDP がリンクの両端でイネーブルになっていることを確認します。

手順の概要

- `config t`
- `interface interface`
- `cdp enable`
`no cdp enable`
- `show cdp interface interface`
- `copy running-config startup-config`

手順の詳細

	コマンド	目的
ステップ1	<pre>config t</pre> <p>Example: <pre>n1000v# config t n1000v(config)#</pre></p>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ2	<pre>interface interface</pre> <p>Example 1: <pre>n1000v(config)# interface ethernet 3/1 n1000v(config-if)#</pre></p>	<p>設定するインターフェイスを指定します。</p> <p><i>interface</i> 引数を次のように定義します。</p> <ul style="list-style-type: none"> イーサネット ポートの場合、ethernet slot/port を使用します。<i>slot</i> はモジュールのスロット番号、<i>port</i> はポート番号です。 管理インターフェイスの場合、mgmt 0 または mgmt0 を使用します。
ステップ3	<pre>cdp enable</pre> <p>Example: <pre>n1000v(config-if)# cdp enable</pre></p>	<p>実行コンフィギュレーション内のインターフェイスの CDP をイネーブルにします。</p> <p>動作するには、このパラメータが同じリンクの両方のインターフェイスでイネーブルになっている必要があります。</p>
	<pre>no cdp enable</pre> <p>Example: <pre>n1000v(config-if)# no cdp enable</pre></p>	<p>実行コンフィギュレーション内のインターフェイスの CDP をディセーブルにします。</p> <p>2つのインターフェイスのうち一方の CDP をディセーブルにすると、すぐにリンクの CDP がディセーブルになります。</p>
ステップ4	<pre>show cdp interface interface</pre> <p>Example: <pre>n1000v(config-if)# show cdp interface interface</pre></p>	<p>実行コンフィギュレーション内のインターフェイスの CDP ステータスを表示します。</p> <p><i>interface</i> 引数を次のように定義します。</p> <ul style="list-style-type: none"> イーサネット ポートの場合、ethernet slot/port を使用します。<i>slot</i> はモジュールのスロット番号、<i>port</i> はポート番号です。 管理インターフェイスの場合、mgmt 0 または mgmt0 を使用します。
ステップ5	<pre>copy running-config startup-config</pre> <p>Example: <pre>n1000v(config)# copy running-config startup-config</pre></p>	(任意) リブート後に永続的な実行コンフィギュレーションを保存し、スタートアップ コンフィギュレーションにコピーして再起動します。

例

次に、イーサネット ポート 3/1 の CDP をイネーブルにする例を示します。

```
n1000v# config t
n1000v(config)# interface ethernet 3/1
n1000v(config-if)# cdp enable
n1000v(config-if)#
```

次に、イーサネット ポート 3/1 の CDP をディセーブルにする例を示します。

```
n1000v# config t
n1000v(config)# interface ethernet 3/1
n1000v(config-if)# no cdp enable
n1000v(config-if)#
```

インターフェイス カウンタのクリア

この手順を使用すると、イーサネット、vEthernet、および管理インターフェイスのカウンタをクリアできます。

はじめる前に

この手順を開始する前に、次のことを確認または実行する必要があります。

- EXEC モード、コンフィギュレーション モード、またはインターフェイス コンフィギュレーション モードで CLI にログインしていること。

手順の概要

1. `clear counters interface-type interface-id`
2. `show interface interface`

手順の詳細

	コマンド	目的
ステップ1	<pre>clear counters interface</pre> <p>Example: n1000v# clear counters ethernet 2/1 n1000v#</p>	指定したインターフェイスのカウンタをクリアします。 <ul style="list-style-type: none"> • <code>ethernet slot/port</code> • <code>vethernet number</code> • <code>mgmt 0</code> または <code>mgmt0</code>
ステップ2	<pre>show interface interface</pre> <p>Example: n1000v# show interface ethernet 2/1</p>	インターフェイス ステータスを表示します。指定したインターフェイスのカウンタもあわせて表示します。 <ul style="list-style-type: none"> • <code>ethernet slot/port</code> • <code>vethernet number</code> • <code>mgmt 0</code> または <code>mgmt0</code>

例

次に、イーサネット ポート 5/5 のカウンタをクリアしてリセットする例を示します。

```
n1000v# clear counters ethernet 5/5
```

n1000v#

基本インターフェイス パラメータの確認

次に示すコマンドを使用して、基本インターフェイス パラメータを表示し、確認します。

コマンド	目的
<code>show cdp</code>	CDP ステータスを表示します。
<code>show interface interface</code>	1 つまたはすべてのインターフェイスに設定されている状態を表示します。
<code>show interface brief</code>	インターフェイスの状態表を表示します。
<code>show interface switchport</code>	レイヤ 2 ポートのステータスを表示します。

基本インターフェイス パラメータの機能履歴

ここでは、基本インターフェイス パラメータの機能履歴を示します。

機能名	リリース	機能情報
システム ジャンボ MTU	4.2(1)SV1(4)	システム ジャンボ MTU は 9000 に固定されており、変更できません。
インターフェイス MTU	4.2(1)SV1(4)	インターフェイス MTU は、1500 ~ 9000 の値として設定できます。
基本インターフェイス パラメータ	4.0(4)SV1(1)	この機能が導入されました。